

口羽家住宅

萩城の南、旧武家屋敷街の中、橋本川のほとりに口羽家住宅はある。江戸時代（1603–1867）に長州藩を治めていた毛利家の家臣である口羽家の屋敷である。1674年に口羽就通（年代不詳）が家臣の中でも高位である頼組に任命され、1868年の徳川幕府滅亡まで口羽家がその役職についた。

建築

現在も白壁の保存状態が良く、江戸時代の上級武家屋敷の代表的な例となっている。特に長屋門は、当時の建築物としては貴重なものである。長屋門には、番所、馬小屋、物置が備えられており、萩最大の広さを誇る。

家の主要部分では、2つの大きな部屋の間には狭い畳敷きの空間がある。万が一の攻撃の際に主人のもとに駆けつけるため、衛兵たちがここで待機していた。このスペースは「間の間」として知られるが、「武者隠し」とも呼ばれていた。「間の間」には、木の床は軋んで衛兵の存在が気づかれてしまうことを防ぐため、畳を敷いていた。

吉田松陰（1830–1859）や伊藤博文（1841–1909）など、地元の他の著名人が住んでいた住宅の低い天井とは対照的に、この住宅には異常に高い天井の部屋が多い。この天井の高さは、非常に身分の高い一家であったことを示している。さらに、建物内でも、部屋ごとに天井の高さが身分の違いや男女関係を示していたことがわかる。女性と子供たちが集まる庭に面した空間は、特に天井が低い。

一族の品々

口羽家の歴史に関連したいくつかの品々がこの住宅には展示されている。例えば、メインルームには「馬印」が展示されている。このような印は、戦場での位置を示すために用いられ、武将が遠方から観察したり、軍勢を指揮したりすることができるようになっていた。口羽家の馬印は、高級感のある桐製のもので、儀式用に使われていたことがうかがえる。大名である毛利家が参勤交代で江戸に出向く際の行列における飾りとして使用されていたことが推測される。

また、江戸時代の武器も展示されている。犯罪者を逮捕する際に使用された袖搦（そでがらみ）や、長い柄にカーブした刃が付いたなぎなたといった棒状の武器、襖の上のラックに置かれている。なぎなたは、槍のように刺したり、剣では不可能なほど遠くから敵を斬りつけたりするのに使われていた。しかし、ここに展示されているものは刃が薄く、貴金属がちりばめられている。ほとんどの場合、これらは戦場で使用されるものではなく、参勤交代の行列において使用された虚飾の武器であった可能性が高い。

当初の口羽家住宅は、現在の建物よりもかなり広いものであった。1974年に重要文化財に指定

された後、江戸時代の資料をすべて取り出し、小規模ながらも丹精込めて再建された。

住所：山口県萩市堀内 1-3 山口県萩市堀内 1 丁目 3 番地

電話番号：0838-25-3139（萩観光案内所）

営業時間：午前 9 時から午後 5 時まで（毎日）

入場料：100 円

アクセス：萩美術館から南西へ徒歩 11 分

Google マップリンクは[こちら](#)